

第三部

河原村の田中一族と渡部一族

舞台でいえば、第二幕、となった。

予定通りに、平成十二(二〇〇〇)年六月五日からの週を、念願の風早郷訪問のための休暇とした。松山空港から一キロほど離れたレンタリースの店で、そのころデビューしたばかりの一リツターエンジン搭載のヴィッツをピックアップして、いよいよ「血族」たちの記憶を呼び覚ますための一人行脚にとりかかった。

『四国・花へんろ』を謳った標語を、街のあちこちの観光ポスターや、辻々の石碑で見かける。菅笠を冠った白い遍路姿のいくつかを、国道一九六号線を北上しながら追い抜いた。堀江の町を過ぎると、いきなり光の溢れる朝の海が、左手に現れた。島影は興居(ごい)島に違いなかった。それが、栗井の坂に差しかかった証しだったのに、天候に恵まれ過ぎて、期待していた風の色が変わる瞬間を味わうことはできなかった。

一旦は車をとめ、栗井の井戸と、「涼しさや 馬も海向く 淡井坂」と石に彫り込まれた子規の句碑を確かめてから、まだそのころは松山市に編入されていなかった北条市役所へと先を急ぐ。一〇時までには到着して、面倒な取得手続きを午前中で終わらせておきたかった。



かつては難所のひとつに数えられた栗井坂も削られている

■戸主・田中嘉蔵を軸としたドラマ

市役所で応対に出た市民係の青年の胸章に「正岡」の名が刻まれている。正岡氏族の本拠地に踏み込んだ実感が高まってくる。眉の濃い、目の涼しい、清々しい風貌の青年である。手際よく三通の戸籍に関する書類を複写してくれた。従姉の嶋津良枝さんから送られた「福岡県鞍手郡直方・正岡重吉」の「除籍謄本」と「改製原戸籍」が通行手形となつて、まず、戸主・田中嘉蔵を軸とした田中一族の「除籍原本」が眠りの世界から引きずり出された。父・徳一の話の中では、これまで、田中一族に関する情報は寂しすぎた。祖母方との釣り合いが取れないとでもいう卑屈な感じは否めなかった。

愛媛県風早郡河原六番戸 明治十□（一字判読不能）年七月十四日代替リニ付キ改写ス  
●明治十三年一月三〇日 相続ス

父 利平 長男

明治三〇年一月十九日死亡

● 亡祖父 吉右エ門長男  
戸主 田中 嘉蔵 萬延元年四月十三日生

● 明治五年以前當県和氣郡大栗村光宗檜蔵長女人籍ス  
利平 妻  
父 利平 文政十一年八月二十一日生

母 カメ 天保五年二月三日生

●明治二十六年四月八日

當県上浮穴郡明神村大字西明神正岡周平養子

父利平 次男

弟 重吉 慶応元年六月九日生

● 父利平 三女

妹 ツル 明治二年九月一〇日生

●明治二十一年七月二十八當県和氣郡福角村高橋久蔵長女入籍

明治二十二年十月十二日當県和氣福角村高橋久蔵方へ離縁復

歸ス

妻 ヨウ 元治元年五月六日生

●明治二十三年當県當郡當村大字河原田中糸次長女入籍ス

妻チヨ 明治五年八月二〇日生

● 長女 サカエ 明治二十五年七月二十八日生

● 次女 カヨ 明治二十八年二月九日生

● 三女 トクヨ 明治三十一年一月十三日生

やつと祖父方の「田中一族」の詳細な顔つきが見えてきた。ま

ず、重吉の兄・嘉蔵が二〇歳で家督を相続し、三七歳の若さでこの世を去っていること。そうした不幸な事態でありながら、弟の重吉がすでに正岡家に養子に出たこともあつてか、田中家を相続した気配はない。嘉蔵には幼いサカエ（当時五歳）を筆頭に三人の女兒がいるだけではないか。その疑問には二枚目の除籍原本が答えてくれた。次男の重吉が復籍する動きもなく、嘉蔵の長女サカエが五歳で相続している。明治三〇年七月一四日の日付けである。ここからが、かなり複雑な、異様な家庭環境が露われてくる。まず夫を喪ったばかりの母親・チヨが明治三二年五月三日に河原九番戸田中權七と婚姻の届け出をして、除籍されている。新しく養子を迎えたわけではなかった。五カ月後の一〇月三日、祖父の利平が逝く。遺された三人の幼女たちはどうなったか。



■正岡重吉の付箋二枚にこめられたもの

明治三三年一月、後見人が職に就く。河原十三番戸の田中栄吉である。多分、かつての河原村の庄屋の家柄であろう。同三五年三月、本籍地が変更されている。十三番戸にか、それとも三二二番地へ、か。サカエの欄は付箋で一杯である。「明治四五年一月二四日、温泉郡素鷲村大字立花一五七番地戸主渡部菊次郎三男岩吉卜人夫婚姻及比岩吉家督相続」の届出があつて、同年二月、後見人・田中栄吉任務終了届出。ここは想像の域を出ないが、叔母のツルが明治三〇年の七月に当郡三津浜町大字広町斧友治妻二嫁していながら、三四年四月には協議離婚して河原へ戻っている。幼女たちの面倒はこの女性が見たに違いない。そして三六年には三三二番地に分家している。

明治四〇年、養子縁組解消……？

三枚目の「正岡重吉」のそれも、たつぷり書き込まれた付箋が、様々な事情を語りかけてくる。なぜかぼくには、呻きにも似た声になって、聞こえてくるのだ。

●本籍地 愛媛県温泉郡粟井村大字久保三六五番地

明治二六年四月八日当県風早郡粟井村大字河原田中嘉蔵弟父利平二男入籍

明治三十一年一月七日当村大字西明神正岡慶三兄養父周平養子分籍ス

明治三五年六月一八日當県上浮穴郡明神村西明神五三番戸ヨリ  
 転籍届出受付入籍

明治三九年九月二二日温泉郡粟井村大字久保四三七番地ヨリ転  
 籍届出同日受付入籍

明治四〇年九月一日当村大字西明神<sup>53</sup>番戸慶三養母正岡ユキ養  
 子協議離縁届出

明治四〇年一〇月一九日上浮穴郡明神村大字西明神五七一番地  
 ヨリ転籍届出入籍

福岡県鞍手郡直方町大字直方六六番地ニ転籍届出大正七年一月  
 二三日受付全戸除籍

戸主 正岡 重吉 慶応元年六月九日生  
 分家に因り明治三二年一月七日戸主トナル

●明治三二年一月一〇日当村大字西明神正岡慶三父周平養女当  
 県風早郡粟井村大字河原渡部長五郎式女人籍

明治四〇年九月一日当村大字西明神五十三番戸慶三養母正岡ユ  
 キ養子協議離縁届出

父 渡部長五郎 式女

母 コマ

妻 クラ

明治五年四月二二日生

長男の順吉、式男の重徳、長女・キミエ、三男・徳一、四男・

鶴一、五男・亀一、六男の兼一までが、そっくり一団となって、  
 この除籍簿に登録されていた。特に注目したのは六男・兼一の出  
 生届が粟井村久保でなされ、受付吏の印が「門田」とあることだ。  
 「門田」はこの地域特有の姓だから、間違いない、この時期には  
 まだ久保で暮らしていた証明となる。

また、重吉の西明神入りがクラに先駆けること五年も前だった  
 という事実をどう解釈すべきか。そして、養母正岡ユキとの協議  
 離縁とあるが、周平さんはどこへ行ったのか。そして重要な事実  
 が記載されていた。それまで西明神の地番が五三番戸だったのが、  
 転籍する明四〇年一〇月の項では「西明神五七一番地」となって  
 いる！つまり、これまでの追跡結果である正岡侶則さんの居住  
 番地そのものと一致したのである。ということは正岡周平―慶三  
 ―公平―侶則の四代が一本の線で繋がったわけだ。

もう迷うことはない。真っ直ぐ、上浮穴郡久万町西明神へ直行  
 したいところだが、念のために、久万町役場で「正岡家」の戸籍  
 を取得し、照らし合わせてからのことである。

もちろん、北条市役所で「渡部一族」の戸籍も取得した。長五  
 郎さんの亡き後は、長男の岩五郎さんが継ぎ、さらに岩太郎さん  
 の長男である桂さんが家督を相続したところまでは順調だった。  
 変調の因は太平洋戦争だった。昭和十七年二月九日、桂さんは「比  
 律賓呂宋島沖の戦闘で戦死」してしまふ。二八歳の若さだった。

家督は昭和一二年生まれの岩男さんが相続したところで、改正原戸籍は凍っている。ところが「ゼンリン住宅図」を開くと、該当する「河原二一七番地」には岩男の名はすでになく、その弟・隆男さんの名が記されている。間違いなく、ここでもなんらかの異変が起こっている、と直感させられてしまう。



粟井坂下の大師堂には子規の句碑「涼しさや 馬も海向く 粟井坂」がある

## 結界を抜けて明神の仙境へ

北条市役所から上浮穴郡久万町役場までのコース取りは、一旦、松山市内に戻ってから、三三号線で南下して三坂峠越えするのが、もつとも無難で早く到着できるはずだ。松山までが一六キロ、そこからさらに三五キロ。山越えの五〇キロとあって一時間で着くのは無理であった。

ここは、第一部の書き出し同様に、『愛媛面影』を援用したい。

久萬山 荏原より東南に当(た)りて高山あり、羊腸の嶮路を登る事三里許にして山頂に一世界あり。久萬と名(づ)く。人家数多建并(びて)衣食に乏しからず、田畑うち開けて尤(も)豊饒の地なり。近世茶を多く産す。其他材木・硝石・椎茸等の産物多し。一区の仙境と云(ふ)べし。

松山市内を抜け、砥部の町に入ったところで、昼食をとる。天麩羅うどん定食。食事の最中も、いま入手したばかりの戸籍謄本を抜けて、記載事項の向こうに秘められているものはないか、と見入っている多くの姿は、他人から見れば、いささか異常に映ったに違いない。うどんの味がどうだったかも記憶にない。心の方がすでに三坂峠に挑んでいて、勘定もそこそこに店から飛び出していた。

一リッターの非力なエンジンにもかかわらずヴィッツは結構、

頑張ってくれる。言ってみれば、東名高速の御殿場ICから箱根の乙女峠への登攀路を上っていくのによく似たコーナーの連続で、それをもうちょっと大振りにした山越えのコースであった。これを昔の人は草鞋履きで、もっと細くて勾配の急な旧街道を越えたというのだから、一日掛かりだったのも無理はない。牛馬が活躍したと聞く。この難関を重吉とクラはどんな想いで越えて行ったのだろうか。確かに、駆け落ちして逃げ込む先としては、久万山は絶好の秘境だな、などと妙な感心をしているうちに標高七二〇メートルの三坂峠の頂上を越え、峠の茶屋風の、俗っぽい休憩場所は無視して、一気に明神村の入り口に差ししかかった。



三坂峠を越え、高知方向へ向かう三号線を下るとこの明神の里が待つ

あつと息を飲む景色が飛び込んで来た。圧倒的な緑の洪水に押し潰されそうな不思議な感覚はどこから来るのか。杉と檜のびっしりと植えこまれた山肌が世俗的なものをすべて吸い取って、久万山という仙境を霊域に変えていた。目の高さで山並みの頂上が刈り揃えられ、その手前に三つばかりの形のいい瘤が重なり合いつながら、緑が濃縮されている部分と淡く引き伸ばされている裾野のあたりを、見事に演出していた。

こんもり盛り上がった瘤の部分が、かつての山城の砦跡か。となると、左から船山・笠松・大除の各城跡か。窪みを渡って右側で睨みを利かせているのが、越木甫氣（こしきがほけ）城跡か。その奥が天神森城跡だろう。いよいよ、久万山系・正岡氏の本拠に足を踏み入れる、と意識した瞬間から、まるでそこからは修験行者が結界を張りめぐらしたのに触れたとでもいうのか、身体が痺れて身動きがとれなくなった。ともかく、ヴィッツを停めるしかなかった。折よく、野花に囲まれた小さな駐車スペースに差ししかっていた。

目の下を小さな流れが南へ向かって下っている。それが久万川に違いない。水をたっぷりと張った稲田が光る。そのむこうの山壁の陰から、こちらに誘惑の視線を送っている集落は、ひよつとしたら西明神か。すると、ここはどうやら、まだ東明神の村落であるらしい。自動車の往来がひとしきり続き、道端の矢車草と山吹草が可憐に揺れた。その途端・結界が解けた。明神村へ入ることを許されたらしい。霊気を大きく吸い込んでやる。久万町役場



は西明神を抜け、町中へ入ったと思ったら、すぐに目と鼻の先だ  
った。

### 西明神村五三番戸の「正岡家の人々」

戸主・正岡慶三を筆頭とした「除籍原本」、正岡公平を筆頭とした「改製原戸籍」、それに正岡重吉を戸主とした「除籍謄本」の三通が、やっと手元に来た。「正岡重吉」に関する記述のある部分については、直系のものだけに取得が許される。しかし、現在の戸籍については、該当戸主の同意がない限り、それは取得できない仕組みだという。

戸籍謄本を取る手続きをしているとき、女子吏員に『久万町誌』が手に入るかどうかを尋ねたところ、教育委員会で頒布してくれる、と思いがけない返事が来た。国会図書館をしゃぶり尽くすほど調べても閲覧できなかった『久万町誌』である、直ぐにでもこの手と目で確かめたいし、三通の戸籍謄本もじっくり確かめたい。『久万町誌』の方から、手がけることとした。町役場の向かい側の、合掌造り風の建物が、教育委員会だった。

『久万町誌・増補改訂版』は地元の人間なら二〇〇〇円、県外は四〇〇〇円、と係りの男性が笑いながら請求する。布張り装丁の表紙は萌え黄色で、ビニールカバーで守られている。本文は一〇〇〇ページを超える堂々としたものだ。さらに収集した資料をそっくり補強した『久万町誌資料集』もあるのだが、そちらの方はすでに在庫が切れているという。それはこの先の楽しみとしてと

っておこう。果報感が突き上げた。ずしり、と受け取った腕に来る重量感も嬉しい。どこか適当な喫茶店に落ち着くとするか。

国道三三号線に面して『やすらぎの里でんこ』という旅館がある。その付設喫茶室に腰を据えた。コーヒーを注文。早速、『久万町誌』から開く。後半部分に「町村長・助役・収入役・議会議員名簿」の欄がある。九四〇ページ。明神村歴代村長の顔写真。第三代・正岡慶三。ピンと左右に跳ね上げた口髭。端麗で面長な、いかにもその時代を自信たっぷりに生き抜いた地方政治家の迫力がそこにあつた。そして、第七代・正岡公平。こちらはなんと温和な風貌か。多分、母親似に違いない。



正岡慶三さん上とその長男、公平さんの肖像画が「久万町誌」に掲載されていた。この二人の村長さんの関わる戸籍謄本が、いま、ぼくの手元にあつて、これから子細に確認していくという不思議さ。これまで

臃な存在だ。だった血族の、ぼくだけにしか聴こえない声に招かれて、やっそこ。ここまで辿り着けた、と思いたかった。

まるで「パンドラの篋」を手に入れたような驚きの連続である。

まず、慶三さんを戸主とした「除籍簿」から判ったことの第一は、慶三さんも周平さんも、同じ隣村の入野から「養子」として正岡家の人となっている。

周平さんは弘化三（一八六四）年六月一〇日、上浮穴郡入野村に高岡梅次の五男として生まれた。久万山地方での高岡姓は、正岡姓同様、かなりの数にのぼる。『面河村誌』の「大味川六人衆」の項に、高岡一族に関してこんな記述があり、それはこの地方に正岡氏らが住み着いた事情と類似していると思えるので、引用する。

……大除城落城後、幕下の番城の城主・将卒の多くは牢人として知己をたより、あるいは逃れて郡内の村々に移り、百姓の生活に入った。後年、大味川村の開祖と称せられた六人衆も、大除城大野一家とかかわりのある者である。しっかりと記録が、子孫への心得として書き遺されている。（中川新左衛門文書）

中川善之助 中川清政、豊後竹田より伊予国へ来たり、大除城主



大野直昌の家臣となるという。大除城落城後、嫡子善之助、昼野へ来たり、居を構える。

**菅内蔵之丞直俊** 笹ヶ峠で討死した菅内蔵丞道氏の縁者。直俊の祖父菅式部介高善は初め浮穴郡拝志郷花山城によつたと伝えるが、文中三年小笠原兵庫頭政長ら七〇〇騎攻め来たり、花山城を退き昼野に逃れ若山城を築いたという。

**高岡市右衛門** 豊後大友氏に仕えた高岡図書の子市右衛門は、諸所を流転して伊予に来たり、久萬山に入り大野家の家老（勘定奉行）となったと伝える。

別に大味川六人衆由来記（中村小野義正所蔵・高岡家系図）には次のように記載してある。

先ず第一に、中川善之助、昼野に来たりて、東屋に小屋を建て、百姓を営みしが、親友の間柄である高岡市右衛門を説き、菅弥五衛門を伴い帰り浪人となる上は、百姓にならん事を懇願す。ここで、三氏一致協力して、開拓を進む。やがて市右衛門の弟、高岡八左衛門、菅内蔵之丞の義弟、菅（加藤）長助の三氏来たり、一同相談して、大味川開発の先駆者として、それぞれの土地を与えられ次の如く配置した。（以下略）

なお、六人衆余聞として、高岡市右衛門の一族に大力無双なる者がいて、昼野高岡家の墓所に在る大きな川石は、面河川から一人で担ぎ上げしものであるとか、今でも毎年、旧暦九月一五日、中秋の名月の宵、高岡一族は盛大に墓所で追悼のお祭りを行っている話が併記されている。

入野村の高岡家と大味川村の高岡氏とが、どれほどの血縁にあるかは不明だが、久萬の名族の一つであるのは疑いようもない。例の「ゼンリン住宅図」で入野村の高岡姓を洗ってみたが、国道三三号線が旧道と交差する町方の地点に「精造」と「博文」の二軒があるだけで、いわゆる入野本来の村方では見当たらない。なぜだろう。

【註】ぼくの勘は当たった。『久萬の伝説』によれば、元禄のころ、入野に笹野権兵衛という大力無双がいて、久萬川の淵にある大きな石を庭石にしようと考え、部落の力自慢八人を雇った。さて、目当ての石をしっかりと縛り、八人を向こうにまわして、後からひよいと持ち上げた。すると前の八人はペシャンコにつんのめってしまった。「おまえ達は情けない奴じゃのう。わしの背に負わせてくれ」権兵衛は仕方なく、一人で背負い、庭まで運んだと伝えられている。その石は、栄谷地区の正岡侶則さんの庭に現在もすわっている、と。こうもつけくわえてある。聞くところによると権兵衛は、久萬の地酒「お茂ご」で成功した高岡貞一郎氏

の先祖だということである。この高岡氏が周平さんの甥に当たる。つまり周平さんは、昼野高岡一族の末裔であったのだ。

### ■周平さんは入野村 高岡家からの入り婿

さて、周平さんに戻る。正岡瀧右衛門の養子として記載されているがなんのことはない、瀧右衛門長女ユキ（嘉永三年／一八五〇年二月六日生）の婿ではないか。

周平とユキの婚姻の届出は、このころ始まったばかりの戸籍制度では、記載はない。簡単に「明治五年以前二入籍」と片付けられているに過ぎない。が、ふたりの間に明治元年（一八六八）、周平二四歳、ユキ一八歳で女兒が誕生している。慶三の最初の妻となるセイである。明治六年、三女のナミが生まれている。多分、二女は生まれてすぐに死亡したのだろう。あの時代の戸籍を見ると、新生児の生存率は極めて低いのに驚く。

明治一九年六月、入野村森岡吟蔵の二男・慶三が正岡家の養子として入籍する。周平はすぐに隠居して、家督を二一歳の慶三に譲っている。四一歳の若さで、である。ところが、明治二二年十一月三〇日、若妻セイが逝っている。家督を相続しているから、おいそれと慶三は入野の実家に帰るわけにも行かない。二三年四月、三女のナミが入野の八鬼助衛の養女となって除籍した上で、全月一四日に改めて正岡周平の三女として入籍するややこしい

動き。そして、改めて、慶三の妻となる。ナミは一三歳の時に、姉の夫である慶三を迎えたはずだが、どんな想いで義兄を見つめていたのだろうか。

明治二四年一月、長女の 마사エ 誕生。やっぱり女兒か。正岡家は男児に恵まれない家系なのか。

そして、明治二六年四月、田中重吉が風早郡粟井村河原から、周平さんを頼って新しく西明神・正岡家の一員となる。重吉、二八歳の春であった。

渡部クラも一旦、周平の養女となった（明治一九年三月六日）上で、全三一年一月一〇日に、「當村大字入野三四番戸 正岡重吉二嫁ス」とある。この面倒な手続きの背後にあるのが、父・徳一が聞かされていた「駆け落ち」のせいなのか。

### ◆戸主・慶三の項

- 愛媛県上浮穴郡西明神村五三番戸 前戸主 養父 正岡周平
- 一九年六月二八日 當郡入野村 森岡吟蔵二男入籍 戸主 明治二〇年一月二二日相続 周平養子 正岡 慶三
- 大正五年二月一日午前五時三〇分松山市ニ於テ死亡 慶應二年九月五日生 戸主正岡公平届出
- 明治五年以前當郡入野村 高岡源三郎弟 梅次五男入籍

養父 明治三十九年八月一日午後二時死亡  
亡祖父 瀧右衛門養子 周平

弘化三年六月一日日生

◆養母・ユキの項

●明治四〇年九月一日 當村大字西明神五七一番地

養母

正岡重吉養子協議離縁届出

明治四〇年九月一日當村

養父周平妻亡祖父瀧右衛門長女

大字西明神五七一番地 正岡重吉妻クラ養子

ユキ 協議離縁届出

嘉永三年二月六日生

◆妻・セイの項

●明治二二年一月三〇日死亡

妻 養父周平長女 セイ

明治元年三月二〇日生

◆妻・ナミの項

●明治二三年四月一日當村大字入野 八鬼助衛養女トナル

妹 養父周平三女 ナミ

明治六年一〇月一四日生

●明治二三年四月一日當村大字入野 八鬼助衛養女  
全村西明神 正岡周平三女入籍

妻 ナミ

明治六年一〇月一四日生

◆養父周平養子 重吉の項養父周平養女クラの項

●明治四四年三月一〇日當村大字東明神一七六番戸

長女

宇都宮順三郎長男照藏卜婚姻届出除籍

明治二四年一月十四日生

●明治二六年四月八日 當縣風早郡粟井村大字河原

兄田中嘉藏弟

父利平二男入籍

養父周平養子 重吉

明治三一年一月七日 當村大字入野三四番戸へ分籍

慶應元年六月九日生

●明治二六年八月八日死亡

弟

養父周平 二男 宗一

明治二六年八月一日生

●明治二七年十一月一九日死亡

明治二七年七月二七日生

長男 宰輔

●明治二九年三月六日 當縣風早郡粟井村大字河原

渡部 長五郎二女入籍

養父周平養女 クラ

明治三二年一月一〇日當村大字入野 正岡重吉ニ嫁ス

明治五年四月一二日生

◆二男・公平の項

●二男 公平

明治三〇年一月一九日生

●三男 周

明治三三年三月一四日生

●二女 千恵子

明治三六年一〇月二八日生

●明治四〇年一月六日午前九時死亡届出

三女 八重子

明治三九年四月二八日生

●四女 文子

明治四〇年一月二四日生

この時期の西明神村五三番戸・正岡家の人の動きは妙に慌ただしい。時系列で拾っていくと、こうなる。

●明治二六年四月 田中重吉、周平と養子縁組み

●全年八月一日 周平二男宗一が生まれたが、1週間後に早逝。

●二七年七月二七日 慶三に長男・宰輔誕生。一月に早逝。

●二九年三月 渡部クラ、周平の養女として入籍

●三〇年一月一九日 慶三二男・公平が誕生。

●三一年一月七日 重吉、入野三四番戸に分籍。久万山に来て 五年目である。

●全月一〇日 クラ入籍

●全月一五日 重吉とクラに長男・順吉誕生。

●全年七月五日 重吉の二男・重徳誕生。計算が合わないが、当時はこんなことは日常茶飯事。因みに出生届は三五年一月八日とある。

●三三年三月一四日 慶三に三男周が誕生。『久万町誌』によれば、明神村収入役だった慶三氏は助役に昇格(九月)。

●三四年五月六日 重吉の長女・キミエ出生。届出が風早郡栗井村で受付られ、一二月九日に本籍地である明神村へ届書が送送されている。(つまり、もうこの頃には重吉夫妻は明神村に住していないことを証明している)

●三五年一月二五日 第三代明神村村長に就任。

●三六年一〇月二八日 慶三に二女千重子誕生。

●三七年五月一〇日 重吉三男・徳一出生。

そして明治三十九年八月一日、正岡周平さんが卒去する。六〇歳。当然、重吉夫妻と西明神・正岡家との関係は変化する。周平夫人、というより先代瀧右衛門の長女だから、一家の中心的存在のユキさんが養子縁組解消を望んだに違いない。

●四〇年九月一日 重吉・クラそれぞれが養母ユキとの養子協議離縁の届出。

しかし「正岡」姓をそのまま継続した理由はなにか。

大正四年、正岡慶三は政友会の推輓を受けて立候補し、愛媛県会議員に当選する。しかし、翌五年、急逝している。

●大正五年式月一日午前五時三〇分 松山市ニ於テ死亡、正岡公平届出。

さらに、除籍簿に付箋が一枚。「大正五年二月一五日 正岡公平ノ家督相続届出アリタルニ因リ本戸籍ヲ抹消ス 助役」

跡取りの公平さんについては、すでに昭和九年刊の『愛媛県紳士録』で「周平」「慶三」の後継者は彼をおいてない、と指名済みだったのが、ここで立証されたわけである。その公平さんもすでに亡い。

二枚目の謄本「改製原戸籍」には「慶三以後」の西明神・正岡一族の「大正・昭和史」が塗りこめられているはずだ。まず住所表記も「明神村」が消え、「久万町」に替わった。